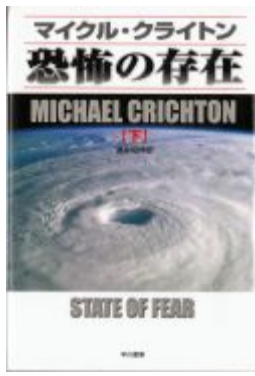


恐怖の存在

STATE OF FEAR



タイトル 恐怖の存在(上・下)
原題 STATE OF FEAR
著者 マイクル・クライトン(MICHAEL CRICHTON)
訳者 酒井昭伸
出版社 早川書房
発売日 2005年9月
ページ数 446p(上巻)、414p(下巻)

初めての小説の書評です。

マイクル・クライトンは「恐怖の存在」のために調査に3年の月日を費やしたといわれています。本書は、地球温暖化問題への関心を高めるために環境過激派が自然災害を引き起こすという筋書きです。クライトンは、小説の中で実際のデータや研究を引用しながら、気候科学の実態と不確実性を示そうとしています。小説には「こじつけ」に近い議論や科学論文についての誤った記述がたくさんあり、更には「温暖化懐疑派」と呼ばれる人たちの意見を基にした、誤解を招く言説も含まれています。

それはとも角、圧倒的なスペクタクル感覚をたっぷり本書を味わった後で、現在社会が抱え込む様々な矛盾を考えこませる問題作でもあります。

さて、物語は次のように展開していきます。パリの北にあるフランス海洋学研究所から、証人と証拠を消し去ったうえで、波動力学の実験データが盗み出された。時を同じくして、マレーシアでは空洞発生装置が、ロンドンでは膨大な量の対戦車ミサイル用の誘導ワイヤーが、そしてカナダでは小型潜水艇が、それぞれ何者かによって調達されていた。いっぽう、MIT危機分析センター所長のジョン・ケナーはネットを通じていち早くその動向をキャッチする・・・これらを結び付ける共通項はいったい何なのか？
物語は環境テロリストとそれを追う対テロ組織の、水面下での暗躍から始まります。

平均海拔1mの島嶼国家ヴァヌアツは、水位上昇による領土の喪失を恐れ、地球温暖化の元凶であるとして最大の二酸化炭素排出国のアメリカを相手にした提訴を決める。訴訟支援を表明した環境保護団体NERFに、多額の資金援助をしている富豪ジョージ・モートンだが、その行動が普段と違うことに顧問弁護士のピーター・エヴァンズは気づく。

時をおかず、モートンは失踪して行方不明になり、自宅からは暗号のように四組の数字が並べられたメモが発見される。そこにケナーが現れ、人為的気象災害を目論む環境テロリストの存在が明らかになるのだが、果たして目標となる地域は何処で、一体そこで何が引き起こされるのか？ エヴァンズはモートンの秘書サラと共に、南極に始まる、世界各地での戦いの渦に巻き込まれていきます。

いま現実に起こりうる恐怖を描きながら、地球温暖化への明確な立場を示して、全米でも話題騒然の話題作だったようです。

米国には「政治」、「法曹」、「メディア」複合体のような魑魅魍魎が存在し、それが意図的に恐怖や悪感情を煽り、恐怖を食べ物にしているとクライトンは主張しています。すなわち、

- 1) 地球が温暖化しているとは断言できない。
- 2) 温暖化しているとしても、人間の排出する CO₂ が原因とは断言できない。
- 3) コンピュータ・シミュレーションにはまだまだ限界がある。
- 4) 温暖化問題の科学的側面が経済・政治・イデオロギーなどによって抑圧されている。
- 5) 表立って温暖化に異論を唱えられない雰囲気醸成されている。
- 6) 冷戦後の仮想敵として温暖化問題が利用されている。

など、温暖化の是非よりも、是非を問えないことのほうが問題だと主張します。

日本でも、研究者は「地球は温暖化している」と言わないと予算が下りないと言われていていますね。

クライトンは、

- 1) 何事にも虚心坦懐に耳を傾ける一方で、迷信や疑科学に騙されないように、
- 2) 何事も決して鵜呑みにせず、ちゃんと検証してから判断しよう
- 3) 科学的な思考をしよう。

といているのです。

といったことを考えながら本書を読むとなかなか味わいのあることに気が付きます。

さて、本文の中に MIT 危機分析センター所長ケナーがハリウッド俳優のテッド・ブラッドリーに話しかけるところがあります。書評、「[捕食者なき世界](#)」にも出てくるイエローストーン公園の話です。小説の中にこのような議論が出てくること自体が面白く、一気に読んでしまいましたが、イエローストーン公園の管理の話は、日本でもしっかりと考えてほしい問題の一つです。少し長いのですが、本文からイエローストーンのところを借用します。

環境問題を考えるのに大いに参考になるので記しておきましょう。下巻の 260p から……。

『イエローストーン公園は・・・と、ケナーは説明をはじめた・・・世界で初めて自然を保全する目的で公園に制定された原生地域だ。ワイオミング州のイエローストーン河を中心とする地域は、むかしから景勝の地として広く知られていた。探検家のルイスとクラークもその美しさを誉め讃えているし、ビアスタットやモーランといった画家が絵に描いてもいる。

19世紀後半のこと、生まれて間もないノーザン・パシフィック鉄道は、観光客を西部に呼ぶための観光地にすべく、このイエローストーンに目をつけた。一つには同鉄道の働きもあり、1872年、ユリシーズ・グラント大統領は、200万エーカー（1エーカーは4,047m²）の土地を自然保護公園に定めるにいたる。イエローストーン公園の誕生である。

ただし、創立当時もその後も、ある大きな問題については、ずっと認識されないままであった。自然を保全するという試みは、誰も経験したことがないということだ。それまで人間は、自然を保全する必要に迫られたことなどなかった。それもあって、当初は実際よりもずっと簡単な仕事だと思われていたのだろう。セオドア・ルーズベルトが1903年に同公園を訪れた時、そこには大型鹿（エルク）、バッファロー、クロクマ、シカ、ピューマ、灰色熊（グリズリー）、コヨーテ、オオカミ、オオツノヒツジ等、狩猟の対象となる動物が悠々と暮らしていた。この時点で、生物を自然の状態に自生させる方針が出来上がっていたことは間違いない。公園管理局ができたのは、その直後のことである。公園管理局は内務省に設けられた新しい部局で、設立の目的はひとえに、公園をオリジナルの状態に維持することにあった。

ところが、その約10年のうちに、ルーズベルトが見た動物でひしめく光景は永遠に失われてしまう。原因は公園管理官にあった。公園を始原の状態に維持する務めを負った彼らは、公園と動物を動物を保護するためによかれと考え、つぎつぎに手を打ったのだが・・・・その内容が決定的に間違っていたのである。

「いや、しかしだな」ブラッドリーが反論しかけた。「今の知識は、そのころよりずっと増えているわけだから・・・・」

「いいや、けっして増えていない」とケナーはいった。「私が言いたいのはそこなんだ。われわれはつねに、過去の自分たちよりものを知っていると言い張る。しかし、現実にはイエローストーン公園で起こったことを聞けば、けっしてそうでないことが判るだろう」

具体的にはこうだ。初期の公園管理官たちは、あやまってエルクが滅びかけていると思い込んだ。そこで、エルクの数を増やすため、公園にいる捕食獣の数を減らすことにした。その手段として行ったのが、公園内のオオカミをことごとく射殺し、毒殺することだった。さらに、インディアンには公園内で狩猟をすることを禁じた。イエローストーンは昔から彼らの狩猟の場であったにもかかわらずだ。

こうして過剰に保護されたエルクは、爆発的に増殖し、特定の樹の枝葉や草を大量

に食い漁った。その結果、一帯の生態系は変化し始める。エルクが枝葉を食いつくし、絶滅させた樹の中には、ビーバーがダムを造るのに使う種類もあったため、まずビーバーが消えた。管理官たちが同地域の治水にビーバーたちの存在が欠かせないことを知ったのは、この段階でのことである。

ビーバーが消えたことで、河辺の草地が消えた。それによって、マスとカワウソが消えた。連鎖的に土壌侵食も進み、公園の生態系はますます変化の度合いを深めていく。

1920年代に入るところには、さすがにエルクの個体数が多すぎるとわかっていたので、管理官たちは、こんどは射殺し始めた。それまで保護していたエルクを、何千頭とだ。だが、植生の変化は、もはや後戻りの効かないところまできており、樹々と草のほどよい混生状態は、もう二度と再生されることがなかった。

いっぽう、昔からインディアンが行ってきた狩猟は、じつはエルクやムースやバイソンの個体数調整に一役買っており、公園の生態系を安定させるうえで貴重な影響を与えていたことが徐々にわかってきた。さらに、遅きに失したこの認識に加えて、アメリカ先住民が自然に対して積極的に介入してきたという、より普遍的な実態も明らかになりつつあった。白人が新世界を発見した時に見た手づかずの大自然は、およそ手づかずなどではない。北アメリカ大陸先住の人類は、何千年にもわたり、生態系に多大な影響を及ぼしてきたのである。…野焼きをし、森の広がりを制御し、特定の動物種の個体数を減らし、他の動物種を絶滅に追い込むことで。

以上の知識をもって顧みれば、インディアンに狩猟を禁じたことは誤りであったように思われる。だが、それは公園管理官たちが連綿と行ってきた数々の過ちのうちの一つでしかなかった。

グリズリーはいったん保護され、次に駆逐された。オオカミは駆逐され、こんどはよそから連れ戻された。フィールドスタディーや無線首輪を含む動物の研究は中止され、特定種が絶滅の危機に瀕したと宣伝されるや、手の平を返すように再開された。また、山火事の効用を理解することなく火災予防策が撤回されると、こんどは大規模な森林火災を放置し、結局は消火に動き出したものの、降雪に助けられて鎮火した時には、何千エーカーもが焼け野原になるという事態を招いた。その一帯は、いっこうに森が再生することなく、いまなお荒廃したままになっている。

1970年代には、河にニジマスが放流されたが、大半はたちまち先住の肉食魚に食い尽くされてしまった。そういったことの繰り返しだ。そんな事態が、ずっと繰り返されているのだ。……………」』

訳者あとがきを読むと、本書の原題 (STATE OF FEAR) は、「政治・法曹・メディアが生き血のように吸う恐怖の蔓延した状態にある国」という意味だそうです。小説として誉めている書評も多い反面、新聞系の書評では、アレルギー反応的に不快感を表明し

ている例が目につくといいます。

社会的使命をになって行っている温暖化報道を真っ向から否定され、あまつさえ敵のはずの政府といっしょくたに悪役扱いされたせいでしょうか、サンフランシスコ・クロニクルなどは、クライトンを右寄りだと決めつけ、アメリカの左派の作家はどこに消えてしまったんだ！と嘆いている程だそうです。

記者は、クライトンの主張は、いろいろな参考資料にインスパイアされたようだが、なかでもひととき大きな影響が認められるのが、ビョルン・ロンボルグの「[環境危機をあおってはいけない](#)」だそうです。ロンボルグが言っているのは、「様々な統計データの見方を示した上で、[予防原則](#)の立場から温暖化防止策をとるのはいいが、[京都議定書](#)にあるような莫大なコストをかけるわりに効果の小さい策でなく、もっとコストに見合う有効な対策を取ろうじゃないか」というものです。本書でも、コスト面について言及しているのはこのあたりからきているのかも知れません。

各所に多数の文献が掲げられており、しかもほとんどの文献には彼の丁寧なガイドが付いています。「人類を救う唯一の希望は科学にある」というクライトンの姿勢がよく伝わってきます。科学の限界と能力を知ることもまた大切ですが、よく確かめもしないで環境問題の存在を信じることは少なくとも非科学的です。もっとも、この本を鵜呑みにすることもまた同様に非科学的ですね。

クライトンの作品だけにスリルとサスペンス満載で、地球温暖化のこじつけに近い議論を除けば、小説としても一級品です。お勧めの一冊です。

2011. 3. 1
